

ウエディングドレスデザイナーの桂由美氏と、音楽評論家・作詞家の湯川れい子氏は、それぞれ戦後の暮らしの中で、婚礼衣装と音楽という業界に光を見出し、女性パイオニアとしてこれまで活動してきた。1964年の東京オリンピック以降、国外にも果敢に挑戦。数々の努力が今の2人を作り、業界の活性化に繋がった。今号では桂氏が提案する「恋人の聖地プロジェクト」や、「ふるさとウエディングコンクール」を始め、両氏が考える音楽・ブライダル業界の連携など、結婚式に欠かせない音楽について、意見・考えを聞いた。

桂由美氏プロフィール

ユミカツラインターナショナル代表取締役社長
一般社団法人全日本ブライダル協会会長

1964年日本初のブライダル専門店「桂由美ブライダルサロン」を赤坂にオープン。翌年、日本初のブライダルコレクションを開催したことから、ブライダルファッションの幕開けとなり、第一人者として業界を牽引してきた。1969年には全日本ブライダル協会を設立し、1975年には乃木坂にサロンを移転する。全米ブライダルコンサルタント協会の名誉会員の称号も推挙され、昨年創作50周年を迎えた。

湯川れい子氏プロフィール

一般社団法人音楽特定利用促進機構 (ISUM) 理事
作詞家、音楽評論家
日本作詩家協会 名誉会長

昭和35年、ジャズ専門誌『スウィング・ジャーナル』への投稿が認められ、ジャズ評論家としてデビュー。早くからエルヴィス・プレスリーやビートルズを日本に広めるなど、独自の視点によるポップスの評論・解説を手がけ、世に国内外の音楽シーンを紹介し続け、今に至る。また、作詞家としても多くのヒット曲を手がけている。

音楽メブライダル業界の融合 曲のリスト化など新たな対応も



音楽評論家・作詞家
一般社団法人音楽特定利用促進機構 (ISUM) 理事

湯川れい子氏

—現在桂さんは、「恋人の聖地プロジェクト」や、「ふるさとウエディングコンクール」を開催していますが、そのきっかけは。

桂「これまでドレスを始め、料理、演出など、結婚式の多様化を目指し活動してきたのですが、約10年前から言われ

始めたのが婚姻組数の低下です。それにプラスされ、地味婚という選択肢も出てきています。昨今思うのは、芸能人が入籍だけで済ませてしまうということ。これに影響を受けて、一般の人でも結婚式をしない人が増えています。この流れをどうにかしたいと思い、まず始めたのが「恋人の聖地プロジェクト」です。現在（今年の1月）は138ヶ所あるのですが、プロポーズにおすすめの場所を認定し、結婚への憧れや産業の活性化を目指すものです。」

「また、結婚する2人を想像した時に、昔は花嫁は家で身支度した後会場へ向かっていまし

た。この文化は日本で少なくなっていました。そうすると、街中でドレスや和装を着た花嫁を見る機会がなくなるのです。ここで考えなければならないのが子ども達への影響。綺麗な花嫁姿を見られなくなることで、結婚式や、結婚そのものの憧れは薄れてしまうでしょう。そこで始めたのが「ふるさとウエディングコンクール」です。外に出て、花嫁姿を披露することを第1の目的にするともに、地域の特産物や伝統ギフトなど、その土地の魅力を発信する結婚式を推奨しています。」

湯川「それに関しては私も賛成です。人の前で愛を誓うことで、結婚式は人と人の繋がりを生み出す場にもなり、憧れを醸成することにもなるでしょう。多くの人に見てもらうことで、「これだけの人が自分達を祝福してくれている」という実感も生まれ、離婚率の低下にも関わってくるはず。籍だけ入れればいいというのではなく、結婚式をやることのメリットは多いと感じます。」

—結婚式を盛り上げる要素の1つとして、音楽が挙げられます。「音楽×ブライダル」というのはもっと深く関わり合えるものなのでしょうか。

湯川「音楽業界の友人達も、結婚式で演奏を披露しています。オペラなどが挙げられるのですが、生演奏の臨場感やはり特



ユミカツラインターナショナル

代表取締役社長
桂由美氏

らの提案が必要になるかと思えます。

湯川「ワインを提供するのに、しっかりと知識を持ったソムリエがいるのと同じで、「ミュージックソムリエ」の存在は今後必須になるでしょう。『このシーンにはこの曲、あの演出ではこの曲』というように、その瞬間に合う音楽を会場側から提案する。著作権などの知識もしっかりと持ったスタッフが婚礼業界に出てくるべきです。」

—ブライダル業界における音楽というのは、現在、どのように変化しているのですか。

湯川「エレクトロニック・ダンス・ミュージックというジャンルを結婚式に取り入れるカップルも増えてきていると実感しています。昨今の結婚式はダンス

花嫁への憧れを醸成するには 子ども達にドレス姿を見せる機会を

別です。最近気になるのは、洋楽の曲の使い方。明るいメロディーではあるものの、歌詞が実は悲劇的な内容というケースもあり得ます。ここ数年で、結婚式に相応しい日本語歌詞に書き換えていくという流れがようやく生まれてきました。」

桂「私自身もドレスショーを開催する際に、音楽の重要性は感じています。シックなドレスに可愛らしい曲を流しても、衣装は映えません。ドレスのテーマやコンセプトに見合った曲を選択することで、雰囲気もがらりと変わるのです。」

—結婚式に合わない歌詞の曲を避けるなど、今後は、業界か

タイムがあったり、常に音楽が流れていたりするのが特徴。今まさに変革の時とも言えるでしょう。アメリカの人気アーティスト「maroon 5 (マルーンファイブ)」のミュージックビデオであったのですが、一般の方の結婚式にいきなり参加。参列者はもちろん大騒ぎです。このアイディアは面白いと思いました。プロモーションという一環であっても、日本も人気アイドルやアーティストが式に来れば盛り上がるはず。結婚式の最中の曲1つと考えるのではなく、音楽業界とブライダル業界を1セットとして考えて、始めてもいいかもしれません。」

桂「確かにそのような流れは結婚式も盛り上がりやすし、参列者も楽しいはず。婚礼と音楽の両業界が、手を取り合って動くことにより、大きな流れが生まれるでしょう。」

—音楽とブライダルの融合の可能性はまだあるはずだと。

湯川「先ほどミュージックソムリエの話をしました。じゃあ明日ソムリエが誕生するかと言ったら難しい話です。考えてほしいのは、多くの曲が存在し、カップルは選びきれないということ。その対策として、例えば婚礼業界を牽引してきて、誰もが知る『桂由美セレクトのウエディングソング』というリストを作ることも挙げられます。桂さんだけに限らず、女性に人気のアーティストやアイドルだっていいわけです。有名人の名前を出し、曲をリスト化することで、カップルも曲を選びやすくなるのではないのでしょうか。」

結婚の証人はプレスリー
女性の活躍などなかなか考えられなかった時代に、ブライダル業界、音楽業界のパイオニアとして道を切り開き、その後も大きな影響を与えている二人。前号でも紹介した、渡航自由化と同時に世界に飛び出た話とは、今の時代でもなかなか出来ることではない。時代を作り出すために必要なのはやはり情熱であり、それに関しては今でもその熱が冷めることはないというべきだろう。

座談会のこぼれ話として聞いたのが、湯川さんの結婚時のエピソード。二人の証人はエルヴィス・プレスリーであった。

「私にとってエルヴィスは、仕事上でもっとも大きな影響を与えた人でした。エルヴィスが大好きな男性と出会い、結婚を決め、ラスベガスで式を挙げました。私は、どうしてもエルヴィスに証人としてサインをしてほしかったのですが、なかなかいい返事をもらえませんでした。式で渡米した際、エルヴィスのヒットしたアルバム「ゴールドレコード」の贈呈というタイミングと重なりました。その贈呈をエルヴィス側に持ちかけたところ、向こうも分かっていたようです。「日にちとカメラは確保するので、ゴールドレコードと、結婚相手を連れてきて下さい」と言ってもらえました。そして式当日、エルヴィスが証明書にサインをしてくれたのです。」世界でも唯一、エルヴィスが証人になった結婚式。素敵な思い出もある。